

■ 書 評



統合失調症

福田正人・糸川昌成・村井俊哉・笠井清登 編集
日本統合失調症学会 監修
医学書院
2013年5月, 768頁
本体価格 16,000円+税

精神科を受診する患者の病態の多様化にかかわらず、統合失調症は精神医学のなかで最も重要な疾患であることはいまでもない。精神医学の正統的な教育を受けた精神科医以外には、統合失調症を正しく診断し治療することはできない。また、精神医学の研究者にとっても、統合失調症は、その研究方法が生物学的なものであるか心理社会的なものであるかにかかわらず、目の前に大きく直立する壁でもあり、また迷宮でもある。ときにはその高さに圧倒されて尻込みすることもあれば、ようやく入り口を見つけて侵入しても、その中の複雑な迷路のなかで道を失ったりする。クレペリンとブローラーによる統合失調症概念の確立以来、ほぼ1世紀以上経過し、われわれの医学的な知識や技術は進歩しているものの、統合失調症の十分な理解にまで至っていないことは認めざるを得ない。しかしそれではまったくわかっていないのか。精神科医が一般の人たちに向けて書いた文章では、しばしば「統合失調症の原因は現時点では不明です」などとある。精神科医はばか正直である。同じ程度に糖尿病や高血圧なども原因は不明ではないか。さまざまな研究分野から取り組んでいる精神科医が、統合失調症について現時点での到達点を堂々と示すべきである。

この「統合失調症」と題された分厚い教科書は、帯にあるように「新しい時代の統合失調症のエンサイクロペディア」といえる事実を集大成したモノグラフである。その編纂には日本統合失調症学会のまさに脂のりきった研究者たちがあがっている。統合失調症の臨床と研究をめぐる今日の新しい動きを知りたいと思う精神科医にとっては、まさに待望の書である。

全体は序論と次の5部からなっている。序論には当事者や支援者が執筆している章があり、本書が必ずしも研究者の視点だけで書かれているわけではないこ

とを示している。日本統合失調症学会は当初、学術研究的な傾向が強いと評者は見ていたが、昨年は「べてるの家」のある浦河で学会が開催されたとのこと。当事者の協力なしには研究や治療も進まないことは明らかで、本書も当事者や支援者の視点を大事にしようとしている姿勢がうかがわれる。序論に続く本文は、統合失調症の概念、基礎的研究、診断、治療、司法に分かれている。このうちでも、基礎的研究と治療がそれぞれ全体の2割強を占めているのが目立つ。学会編纂となれば統合失調症の基礎的研究は学術面として重要であろうし、また臨床医学としての精神医学であれば、治療について詳しく語られなければならないのは当然であろう。このようにして統合失調症のほとんどすべての側面が語られたといつてよいであろう。

読者はまず自分のあまり専門としていない分野から読み始めてはどうであろうか。評者は生物学的な指向を持っていたこともあり、社会的治療の部分からまず読み始めることにした。「病名告知」「当事者研究」「スティグマ」「リカバリー」など、地域で統合失調症の臨床に直接携わる精神科医からよく聞かれる用語が、単独の章として記述されている。反対に自分がある程度親しくしている分野の情報については、本書を読み込むことにより最新の知識で更新されることになった。このように、本書は辞書のようにそのときに知りたい情報を得るために使うこともできるかもしれない。しかし、統合失調症の治療に直接携わる精神科医であれば、少しずつであっても、最終的には全部を読み終えなければならないであろう。それが臨床家の義務であるかのように感じさせるだけの迫力が本書にはある。

これだけの厚さの本となると、執筆者ごとに記述の重複があったり、引用文献の数などが著者によって大きく異なったりするなどの欠点はある。しかしこれらは些細なものであろう。むしろこれだけの項目を系統的に取り上げ、執筆者を割り振り、書かれた原稿のレベルをそろえることに、監修者は大変苦勞されたことと推測される。しかし、このような大著を読み込んだとしてもなお、統合失調症に立ち向かおうとすると、修得すべき知識や技法が山のように残されていることに気付く。統合失調症の世界とはなんと奥深いものであろう。これからも新しい知識によって改訂された版が定期的な出版されていくことを祈りたい。

(仙波純一)